

よりよき「音」の造り手達へ

for Better Sound Creators

どこからどう見ても、まったく同じ2本の喇叭(らっぼ)。どちらもドイツのマイスター精神と大和魂が合体して生まれたBrass Sound Creationの誇るモデルには違いないのだが、この2本の喇叭を巡って、このところプロフェッショナルたちの間で秘かな噂が飛び交っている。「アレ、吹いてみた?」「吹いてみた!」「アレとの違い、分かった?」「分かった!」「どうしてあんなに違うんだろう?」「分からない!」とまあ、こんな会話がプロが集うそのスジの店では、ひっそりと交わされているのである。そのあたりの真相を、日本が世界に誇る金管バンド「ヴィヴィッドプラス」で活躍する小島圭滋氏とともに探ってみた。

取材協力:セレクトインターナショナル、山野楽器ウインドクルー

きっかけは、あの ウィントン・マルサリス

小島圭滋氏の仕事でもっとも有名なのは、コレネット奏者としての姿。今や日本を代表する金管バンドに成長した「ヴィヴィッドプラス・トーキョウ」の首席コレネット奏者としての矚目とした姿はすっかりおなじみだが、もちろん本来はトランペット奏者。ジャンルを問わず、素晴らしい音楽家には深い関心を持って接してこられた。中でも、あのウィントン・マルサリスとの交流がBSCと出会うきっかけだった、というところが興味深い。

「ウィントンが好きで、ちょっとした「おっかけ」状態だったんです。それで、もう7年前になりますが、横浜市の招きで彼が率いるリンカーン・センター・ジャズ・オーケストラがはじめて来日した時も、もちろん会いに行きました」

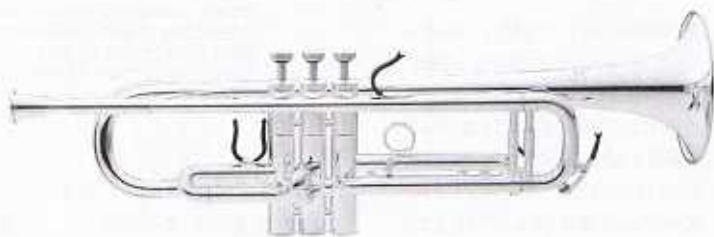
そこで紹介されたのがマーカス・プリンタップ氏だった。ウィントン共々、いち早くBSCの素晴らしさに注目して自ら使いはじめた世界的プレイヤーのひとりだ。

「BSCは、まず彼らが使っている楽器、として認識したのが最初でした。後で彼らから、単身ドイツで修行した日本人が造った楽器だ、と聞いて大変に驚いたものです」

そう。BSCはドイツのマイスター制度の中で研鑽を積み、独自のアイデアを盛り込んだKATO-HORNを成功させて本場ドイツでも一目置かれるクラフトマンTOMOMI KATO氏が手掛けたブランドなのである。

「まあ、誰が造ろうと大事なのは楽器としてのクオリティですよね。マーカスに教えられてから興味を持って吹かせていただき、非常に感銘を受けました」

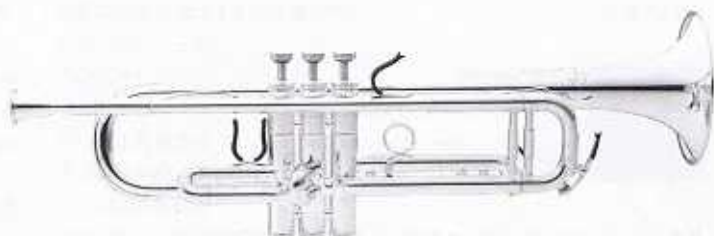
だから今回紹介される新しいモデルTR-205S「オールラウンド」にも多大なる関心



■TR-205S 「オールラウンド」

＜仕様＞ベル材質:イエローブラス特殊2枚取り ベル直径:4.803インチ(122mm) ボアサイズ:0.460インチ(11.70mm) 仕上げ:銀メッキ ＊ケース付属

＊写真のマウスピースは付属していません。



■TR-105S 「ミレニアム」

＜仕様＞ベル材質:イエローブラス特殊2枚取り ベル直径:4.803インチ(122mm) ボアサイズ:0.460インチ(11.70mm) 仕上げ:銀メッキ ＊ケース付属

＊写真のマウスピースは付属していません。



取材は、山野楽器ウインドクルーにて。新しいTR-205S「オールラウンド」を含むラインアップを試していただいた

小島圭彦 (こじま・けいじ)
1967年、兵庫県生まれ。武蔵野音楽大学出身。現在はヴィヴリッドブラス・トーンキョウで首席ホルン奏者として活躍するが、自ら率いる金管アンサンブル「TOOT FIVE BRASS」などでも活躍。有馬純昭氏、横井功氏、津島直弘の各氏に師事。
<http://home.r04.itsc.m.net/tootfive/>



があったという。「BSCの楽器はどれも、ぱっと見た目で惹かれるセンスの良さがあります。ベルの鳴き止めやベルクルーク、チューニングスライドの『背骨』なども特徴的だけど、そこから想像される『重さ』は、まったくない。TR-501Gの完成度の高さはマーカスの演奏からも、また自分で吹いた感触からも分かっていたし、もっとも手ごろな価格のTR-105S『ミレニアム』のコスト

パフォーマンスの良さには本当に驚かされました。しかし、今回吹いてみた205Sにはもっと驚かされた(笑)。ルックスがまったく同じなのに、TR-105Sとはまったく違う音色なんです。TR-105Sに限らずこれまでのシリーズはひとこといって『まるやか』な感じだったけれど、TR-205Sはすばりいって『派手』な音、実に伝統的なトランペットの音がするんです」

自然に吹けるし、反応も早い あの伝統の名器に勝るとも劣らない 優れた吹奏感が魅力です

「楽器を選ぶ際にもっとも重視するのは『吹き心地』です。音程がいいのは今や当たり前で、音のムラやツボを探すのに苦労するような楽器は論外です(笑)。持った感じ、吹いた感じに関してBSCの楽器はどのモデルも安心できるものだけれど、今回のTR-205Sは特にその派手な吹き心地が気持ちよかったですね。『派手』といっても、ジャンルを限定するようなものではありません。トランペット本来の逞しさがある、といえはいいでしょうか?クラシックからジャズ、歌

謡曲まで表現しなければならぬ吹奏楽のトップレベルで活躍する奏者には特に向いている楽器ですね」

トランペットの世界でも、いわゆる『名器』とよばれるブランドの新旧交代の波は激しい。単に有名な『定番』ブランドを選べば安心、という時代から、奏者が自らの感性でさまざまなものを選ぶ、実にうれしい時代になりつつある。そんな中で、安心して選べるモデルのひとつとして推薦したい。小島氏はそう力強く語ってくれた。

【我ら Brass Sound Cats】 Vol.02



天下の名城「姫路城」を背景にTR-501Gを吹く東川氏

その姿に一目惚れしました。(東川幸嗣さん)

神戸を中心に活動するバンド「ステープル・ノート」を率いるトランペッター、東川幸嗣氏。中学時代にドイツのトランペッター、ホルスト・フィッシャーに惚れ込んでトランペットを始めた東川氏は、日本が世界に誇る孤高の指揮者、宇宿允人氏のアドバイスで、音楽の他にもうひとつの職業を身につける決意を早くから固めた。氏はトランペットをきかぬ生活に突入する。公務員としての教員を経て進学塾の講師として活躍する一方で、見事に阪神文化協会主催の新人オーディションにも合格。前述の「ステープル・ノート」をはじめ、氏が参加した「豊田晃クインテット」は、地元神戸でも高い人気を誇っている。これまでに数々の名器を吹きこなし、名器の『音』も『造り』も熟知している東川氏が現在使用しているのはBSCのTR-501G。現在輸入されているラインアップのなかではもっとも高価なものだが、なんと氏はこれをカタログだけで見て購入を決定した、という。「こんなことはこれまでの人生で初めてでした。高価なものですから、普通ならきちんと試奏してから決めるのですが、なぜかこの楽器にはピンとくるものがあつたんです」

写真を見てまずデザインに惚れ、スペックを見て、なるほどと思った、という。「トランペットの音を決定付けるのはマウスピースからチューニングスライドを経て、ヴァルヴケーシングに至る部分だと思っています。そのカーブの見事さにも惹かれるものがありましたし、ベルやチューニングスライド部分の鳴き止め、ピストンボタンの設計等に並々ならぬセンスの良さを感じたんです。ま

た、MLボアという表記ながら、11.7ミリという適度な太さを選んだ点にも「お、やるな!」という感触を得ました。MLボアとLボアの中間ぐらいの大きさで、明るすぎず、また暗すぎず、両方の良い特徴が引き出せる太さだと思ったのです。ベルも大きすぎず小さすぎず—さらに電話で輸入元の方と直接お話しして非常に相通じるものを持った、というのも大きな「後押し」になりましたね。そして実際に備いた楽器を吹いてみて、その直感は大当たりだった、と思っていました。自分にある楽器とは、いつか自然に巡り合うものだと思うんです。そのために常に練律をかさねていかなければいけない、けれど—ともかく今はこのTR-501Gの濃い音色、細かい粒子がぎっしりつまった分厚いサウンドに惚れ込んでいるんです。昔の2000番台のカリキオを重くした感じ、といえはいいでしょうか」

音が先のビームみたいに、拡散せずにまっすぐ聴衆の心に届く、そんな感じが好きなんです、と語る熱いミュージシャンシップに、こちらも感動。伝説に満ちた名城「姫路城」のふもと、防音完備のご自宅で氏は今夜もBSCとともに、その音楽表現の限界に挑戦し続けているのだ。

【東川氏のBSCが聴ける場所】

「東川幸嗣 STABLE NOTES」
ヴァーデン・ガーデン
<http://www.verdan-garden.com/>

「豊田晃クインテット」
「高屋宗兵衛」 <http://www.soubei.net/>
「B-Roxy」
www.b-roxy.com